

Title	クリエイターの研究哲学
Author(s)	由井, 伸彦
Citation	知識創造場論集, 4(2): 24-36
Issue Date	2007-06
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5121
Rights	
Description	北陸先端科学技術大学院大学 21世紀COE プログラム 「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」

イノベーション研究

2 B クリエーターの研究哲学

事業2プロジェクト2B推進担当（マテリアル・サイエンス研究科 教授） 由井 伸彦

クリエイターの研究哲学を形式知に・・・事業2の2B由井コロキウムでは、月2回の頻度でメンバーが集まり教授自らの研究人生の中の研究哲学を議論してきた。「卓越した研究には人生で修養してきた徳が根本にある。」との信念で、ここでは月二～三回書かれてきたコロキウムニュースのほんの一部を紹介する

四月号「研究哲学」の反響に学ぶ

久しぶりに「研究哲学」について触れてみたい。平成十七年十月に発行して以来、多くの方々に読んで頂いたことは、執筆者全員にとって一つのCOE事業の節目でもあり研究を離れて文章を書く初めての試みでもあったので、素直な慶びであった。未だ研究の道半ばの世代の我々が「研究哲学」と題した書籍を発行した事に対しては、多くの方々から反響を頂戴した。その中には、今後我々が参考とすべき諸々の指摘も含まれていたのも、ここにいくつか紹介しておきたい。

東京大学名誉教授・鶴田禎二先生からは、A4版二枚程度のレポート形式による感想を頂戴した。議論は深めるほどよいと云う前置きのもとに、鶴田先生らしい率直な感想・意見が込められていた。以下、その要点を抜き出してみたい。

- 一. 知識の変遷の稿は現代社会の盲点を衝いており、特に「心眼」を持たない科学技術者を輩出させている我が国の大学に対する警鐘には耳を傾けるべきである。
- 二. 社会のための科学の稿は、若手研究者がよく理解すべき事柄であり、理念と哲学をもつことの重要性を感じる。
- 三. 軍事用語の多用が見られるが、「研究とは未開・未知の山野を跋涉するイメージ」であり、メンバー一人一人の個性・能力を尊重したいので、没個性的な軍隊組織とは相容れないと思う。
- 四. 欧米一辺倒の考え方ではなく和魂洋才型の哲学が謳われており、全面的に賛成する。紹介されている金子みすゞの詩はかねてより印象深く残っているものだが、個性の尊重や異文化共生の意味を託したこの詩と戦略・戦術を範とする考えとか心の中でどのように矛盾することなく同居しているのか知りたい。

九州大学総長・梶山千里先生からは、私が山口県出身であるからと注釈つきでシーボルトの関門海峡を描いた絵葉書を頂戴した。スペースの限りを尽くして恐縮するほど多くの賛辞を述べられた後で、以下のコメントが記されていた。

- 一. 指摘されているように「哲学の感性」は養うものである。科学の進展には「常識が非常識」となるプロセスが不可欠であるが、非常識を見付けることが感性と人生経験であると思う。

北海道大学副学長・長田義人先生からは、手書きで便箋三枚にもわたるお手紙を頂戴した。長田先生らしい歯に衣着せぬ表現ながら、以下のコメントがあった。

- 一. 執筆者のような仕事に多忙な年代による「研究哲学」は何となくシックリしない感じだと云うのが最初の偽らざる印象であるが、チームで執筆されたと言う事実からは、哲学には幅広い許容度や立場があることを前提としており、分離融合型の楽しい執筆になっている事に強い魅力を感じた。
- 二. 科学技術が社会と乖離し無機化しつつある現実を見る時、こうした立場や背景に研究の哲学を記述する心意気になったことに最大限の賛辞を送りたい。

こうした先生方のコメントには一様に、研究者個人の理念と哲学に立脚した科学技術が大切である事への同意が記されており、われわれ執筆者一同が微力ながら「研究哲学」で最も訴えたかった事柄を理解して頂けた事がわかって嬉しい気持ちになった。鶴田先生のコメントには、私の過去二十年を振り返って戦略・戦術・兵站から始まって個性や感性に至った考え方の変遷である点を直ちにはご理解頂けなかった部分があったようで、そのあたり「心の中でどのように同居しているのですか？」と云う質問になったものと感じた。ただ、鶴田先生は文中で、「研究者個人とリーダーとでは哲学や理念のありかたが違う筈なので」とも前置きされて本書のCOE事業の中での位置づけについても知りたいとコメントされており、確かに「研究哲学」では個人対象に執筆された部分と組織を背景とした部分とが混在している事は否めず、改めて「研究哲学」の内容を対象に立脚して整理再検討する余地があることも大いに痛感した。

「研究哲学」の出版前後には、国内外での論文捏造事件が世間を震撼させ、政府や各省庁は平成十八年度より改めて懲罰を含めた制度作りを始めている。こういう言い方は不適切かも知れないが、道路交通法や罰則強化によって交通事故を減らそうと云う一般大衆を対象とした事柄と、自らの理念を掲げて科学技術立国の担い手を自負すべき研究者への評価とを、同一レベル・視点で見ているようで、相変わらずの不愉快さを禁じえない。理念がないことを前提とした取り組みでは、更に巧妙化した不正や捏造を助長するだけである。相変わらず根本的な理解が全く感じられず、本末の「本」を理解していないこと甚だしい

と、個人的には思う。巷では「国家の品格」と題した書籍がベストセラーとなっており、私も友人から「研究哲学」と同じような本が書店にあるよと教えて貰って、潜在的には我々が深く意識している事柄が多くの人々に認知されつつあるのを実感している。余談ながら、「国家の品格」には私が執筆したような事と共通するような部分が多く含まれており、「研究哲学」の方が一足先に出版された事実により少し安堵している（小心な私としては、あの本をマネして書いたんだろうと他人から不当に中傷されずに済むので）。

今後の由井コロキウム活動では、個人と組織と異なる視点での哲学・理念を再検討しつつ、「研究哲学」で不十分だった事項を更に抽出していく事が肝要だと考えている。長田先生が感じられたような「楽しげな執筆」と云うコロキウムのスタンスを大切にしながら、これからも議論していきたい。個人的には、糸の切れた凧のようであっていいと思っている。

十月下旬号 研究意識の共有について思う

今回は、科学研究の現場における意識のあり方について、私見ながら述べる事にしたい。私の場合、自分の研究を一口で表現するならば、それは「非共有結合の科学によって初めて可能となるバイオマテリアル機能の創成」と云う事になる。通常の高分子は共有結合によって連結されているのが常識なのだが、分子間力（非共有結合）と云う非常識的な連結を基にした超分子構造ならではの分子構造の動的な特徴を活かす事で、新しいバイオマテリアルとしての機能を創り出そうとしている。このように、何を研究しているのかと尋ねられた時に一言で表現出来ない研究には、科学的視点に立った戦略が無いものだと思っている。また、自身の説明から他の研究者らによる研究内容を連想させるようでは、それも研究の独創性に疑問が残るだろう。あれこれと華々しく盛んに研究しているように見えても、世界の中で二番煎じのような研究では、結局は数十年の後には色褪せて何も残らないのであろう。

そのように独創的な研究を目指していても、限りある人生の中では時間と費用と労力とを投入して可能な仕事量には自ずと限界がある。米国や最近の中国のような大量に生産されている原著論文の洪水を見ていると、彼らと論文数で勝負していけるとは想えないし、また思いもしない。そのような事で結局は、自分独自の思想を背景として、独創的かつ先駆的な要に集中して研究を行っていく事に研究者としての生きがいを感じている。譬えて云うなら、何処にでもあるような品揃えをした大型デパートではなく、世界から注目される小型専門店を目指したいものである。そこに研究室を主宰する立場の人間が十年単位で考えて実行していく研究の真髄があるのであって、それこそが研究の生命であらう。

こうした想いで研究を推進していく上で非常に大切な事の一つに、研究室全体を漲る意

識の共有と云うか思想の統一が挙げられる。先の「研究哲学」でも指摘した事であるが¹、論語の六言六弊にある「知ヲ好ミテ学ヲ好マザレバ、ソノ弊ヤ蕩」²とは、つくづくと思ひ知らされる言葉である。知的好奇心だけでは独創的研究の巨木は育たないと云うのが、私の持論だからである。思想と最終目的とを標榜した研究室であれば、その中で展開されている研究の一つ一つの目的は異なっているように見えても、ある一つの方向を目指している点での共通性なり相通ずる思想なりを感じるものである。それら一つ一つが育ちながら互いに融合していく事によって、いつしか誰もが想像しなかったような巨木に成長するのを夢見ている部分がある。それが、新たな学問の創出であり、大学の研究室が本来果たすべき責務だと想っている。

だから、そのような研究を立案計画して実行するには、そこに参画する学生やスタッフにも思想なり目的なりが共有される事が不可欠なのである。知的好奇心は学問を志す上での最初の一步としては大切であるが、個人の意識は成長（進化）するものであり、好奇心が思想にまで昇華されて互いに共有されない限り、烏合の衆のような研究の寄せ集めにしかないのだと考えている。それが前提でないと、本当に勝手気ままなバラバラなものとなる。だから当然の事ながら、私の研究室で行われている研究は、学生の自由意思を尊重しながらも、彼らの勝手気ままな知的好奇心だけで行われている訳ではなく、私による思想の感化を経て初めて成立しているのである³。

研究室での大切な教育の一つは、そうした研究上の思想を学生に周知徹底する事にあると考えている。研究の要が何処にあるかを徹底して教え込んでおかないと、とんでもない暗礁に乗り上げていたりする事にもなりかねない。徹底と云うと、何だか無理やりに押し込むようなニュアンスにも聞こえるが、そうではない。彼らが納得して日頃の研究展開に活かすようになるまでには長い時間を要するし、彼らが迷ったり行き詰ったり躓いたり倒れたりする度に教え諭し、徹底するのである。そのようにして誰もが研究室の思想と云う軌道を逸脱しない事が大切であり、それによって初めて私の描いた研究のグランドデザインの実現が可能になるのだと考えている。

ところが、各人が自分の知的好奇心を優先してしまうと、折角の目的も疎かになり、いつまでたっても目的に向って進めなくなったりする。最早それは集団とは呼べず、群集に近い状況と云えよう。譬えて云うなら、遠足の目的と、そこまでの距離や所要時間を勘案せずに、出発した途端に見つけた路傍の花やら草やらに目を奪われ、それぞれが勝手気ま

¹ 由井コロキウム編、研究哲学、JAIST PRESS（二〇〇五）、一四八頁。

² 金谷 治・訳注、論語、新潮文庫（一九六三）、二四一頁。「好奇心だけで学問がないと、とりとめがなくなって暴走してしまう」の意。

³ この事を書いた後になって、最近の義務教育現場における教室破壊の実態を新聞で読む機会があった。最近では昔のような暴力による教室破壊は影を潜め、それに代わって友達のように先生が生徒に接していく余り、生徒たちに集団生活で守るべき規範の意識が全く育たず、いつしか教室という集団社会が単なる群集に成り下がってしまったらしい。私は以前から友達同士のような親子関係や師弟関係に疑問を感じて危惧していたので、行き着くところまで行き着いて初めて社会が誤りに気づいた事実に残念でならない心境でもある。

まな観察に終始してしまうのに似ている。勿論、科学研究におけるセレンディピティ⁴の可能性は、そうした道草の中にある可能性も自覚している。しかし、路傍の花が単に美しいだけなのか、遠足の目的より優先すべき程に重要なのかを判断するには、基礎知識と経験とに裏づけされたセンスが必要になる。それを可能にするのは、それまで蓄積してきた知識や経験を元にした視点である。そこに、「知ヲ好ミテ学ヲ好マザレバ、ソノ弊ヤ蕩」の意味する事を感じずにはいられない部分があるのである。実験中に予期しない結果が生じた時に、それをどのように判断するかも、正に同じである。経験の浅いうちは一つ一つの命題が同じような重みで見えたりするものであるが、そのうちにどれが要であるかを理解出来るようになる。そのあたりのセンスを磨いてやるのも、大切な教育の一つである。

研究とは「未開・未知の山野を跋涉するイメージである」とのご指摘を受けた事を、かなり以前のコロキウム・ニュースで紹介した。全くその通りである。但し、ハイキングの目的の理解とそれを自分で楽しむに必要な足腰（基礎体力）とを基にして参加するのが、大前提である。今頃の季節で云うなら、熊の出没の可能性も考慮しないとイケない（後述）。体力も判断力も無い幼稚園児の集団に期待しても叶わないように、研究を共に楽しむ為の基礎学力と研究目的の理解無しには、研究と云う知的ハイキングに参加する資格が無いのである。

研究を通じた教育の過程は「守破離」であると、これまでも何度か紹介してきたところである⁵。研究室の思想や目的を徹底的に理解させて実行させ、それでも私の考えを超えるような道草の中に新たな巨木に育つような芽を見つける事が出来れば、それが「破」に繋がるのであろう。学生がそうした成長を遂げるまで、私は彼らに自分の思想を徹底し続けようと考えている。そのような激しい教育に抗ってでも生まれる新しい考えとは、恐らく弘毅なものであろうと期待している。無菌下に栄養培地を加えないと育たないようなひ弱な芽は要らないのである。恰も、重力に抗して成長する事によって骨格系を発達させている地球上生物そのものにメタファーを感じる部分でもある。

論語にも、「歳寒クシテ、然ル後ニ松柏ノ凋ムルニ後ルルヲ知ル」⁶とあるのを思い出したりする。寒くなって初めて松や柏の葉が散らないのが判るように、人間の真価も逆境において初めて判ると云う意味である。後漢書・王覇伝にある「疾風ニ勁草ヲ知ル」⁷も全く同じで、逆境において初めて人間の真価が分かると云う意味の譬えである。そのように、研究者の真価は危難の時に初めて発揮されるのであり、そうした人格の研究者を育てる場としての研究室があるのである。

研究室の存在は、ある意味で国家のあり方に似ているのかも知れない。これは、本学に

⁴ R. M. Roberts, SERENDIPITY: Accidental Discoveries in Science, John Wiley & Sons, New York, 1989.

⁵ 由井コロキウム編、研究哲学、JAIST PRESS（二〇〇五）、一四七頁。

⁶ 金谷 治・訳注、論語、岩波文庫（一九六三）、一二八頁。

⁷ 後漢の劉秀（後の光武帝）が戦場で大敗して全ての将兵が逃げ去った時、王覇だけが最後まで残った事に由来する諺で、風が強い時に初めて根のしっかりした草かどうか分かる事に譬えている。

赴任した前後頃に読んだ司馬遼太郎の随筆集である「この国のかたち」⁸を基にして想った事でもある。各自が自由の権利主張だけを掲げて勝手気ままにしている限り、その国家はいつしか舵取りが出来なくなって滅んでしまうだろう。一見勝手気ままにしているようでも、自己の役割と責任を自覚し、国家の目指す方向に共に歩む姿勢は最低限必要である。ところが戦後教育の弊害として、六十年前に行われた我が国における統帥権の濫用⁹以来、国家を意識して行動する事が有害で危険であるかの錯覚を多くの人々に植え付けてしまったような部分がある。国家や思想を誇りに想わなくなってきた事は、より小さな社会である組織や家族にも同じような翳を落としてしまっているのかも知れない。確かに、我が国の人々の口から「国益」¹⁰なる言葉が消えて久しいように思う。国民としての意識が共有されていない証拠であろう。国益と云うと何だか国の一方的な利益誘導のように聞こえ目先の事と映るかも知れないが、そんな浅はかな事を指しているのではない。世界の中の一国家としての百年の大計に沿って判断すべき集団行動であり、その為には広く公益の精神を尊ぶ気持ちを育むのも大切だと想っている。

六十年前に我が国を襲った悲劇が個人より国家を優先した事に拠るからと云って、直ちに個人が全てに亘って国家より優先すべきだとは云えない。同じ過ちを繰り返してはいけない事の大切な教訓は理解しているつもりだが、だからと云って羹に懲りて膾を吹くが如き愚行もしてはならない。個人と国家の関係も仁と義、文と武であり、個人の為の国家であるが、国家あつての個人でもある¹¹。この機微の理解を誤ると、無政府主義者のような事になってしまう。大学における科学研究は、入退会もテーマも自由気ままな〇〇クラブとか△△サークルとは違うのである。自分の研究や研究室や大学や、果てには国家に誇りを持てなければ、自分の軸足を失ったまま立っているようなものであり、ちょっとした壁に直面しただけでも研究する意思を失ったり他に興味が移ったり挫折してしまったりするのである。エジソンのような例外を除けば、学生には研究室と云う社会において個と公のいずれも磨かれて成長する事が大切であろう。

友人と一緒に「未開・未知の山野を跋涉する」のを楽しむが如き研究のやり方は理想的であり、そうでありたいと念じている。ここで友人と云ったのは、暗黙に対等な立場や意識であると言う意味である。学生がその域に熟すまでは、研究室の単位で研究の要を教諭しながら、知的ハイキングを楽しみたいと考えている。個人が活かされたいと思えば社会を考える必要があり、それによって結果的に個人が活かされるのである。研究室全体が目指す事を理解し実践しようと心がければ、それによって研究と共に成長している自分を

⁸ 司馬遼太郎、この国のかたち（一）～（六）、文藝春秋（一九九四）。

⁹ 本来、統帥権は大日本帝国憲法に定められた天皇の権能であったが、それを輔弼する立場にあった軍統帥部の軍政の範囲に関する争いによって（例えば、昭和五年に起きた統帥権干犯問題）、軍部の独走を政府が追認する形態を取る結果となり、ついには昭和二十年の敗戦にまで暴走する遠因となった。

¹⁰ 英語では、National interest と云う。我が国の国益がいずこにあるかを議論するのは難しいが、問題提起して議論を重ねる事が大切である。

¹¹ スイスなどの永世中立国家のあり方を参考にするとよく分かったりする。かの国では、個人よりも国家が優先しているのだが、その事すら知らない学生も最近が多いのだろうか。

意識する事になるだろうし、それによって自らの更なる飛躍の基となる「破」の発見にも至るのであろう。学生には、研究を通じてそれを体験させたいと想っている。経験が未熟であるが故の近視眼的な判断は禁物であり、大所高所から物を見る眼を長い時間をかけて育てる事が大切であるとも云えよう。仮に今は理解出来なくとも明日理解出来る事を信じて研究に精進する気概も大切である。「桃栗三年、柿八年」とか「石の上にも三年」とはよく云ったものだ¹²と頷いてしまう。

最近「安・近・短」な事ばかりが目立つ世の中であり、大学を取り巻く状況においても研究業績や教育実績を期限内に示す事ばかり要求されたりしている。物事を計画的に実行する事は大切であるが、それが全てではない。計画的研究の途中で思わぬ果実を手に入れる事もあり、それに敢えて時間を費やすだけの価値があるかどうかを見極めた上で、新しい挑戦を始める事もある。思わぬ苦楽を経て学生と研究上の思想の一致を見て、時を忘れて研究を加速させる事もある。そうした積み重ねの果てに、気が付けば学生と研究意識を共有し、彼らの教育にも役立っている事を実感したりするのである。これだけの期間にこれだけの事をすれば学生がこのような育つなどと明言して実行できる教育など、所詮は表面的な事ばかりである。本質的な事まで遡って教育出来るだろうと指摘されても、計画的に期間内に終了させるのは困難である。それこそ、現場を知らない傲慢な話である。

いつの日か研究の果てには、後進の学生諸君には研究途上に横たわった私の屍を越えて前へ進んで行けと促したいところでもある。私の両肩に足を掛けてでも大きな壁を乗り越えて欲しいものであり、それを意識しながら共に研究を進めるような集団が研究室であり、それが研究室に宿る思想なのである。一つの研究室が目指す最終目的とそれを通じた思想の涵養とが表裏一体となって創造的研究を推進するのであり、その事によってのみ研究者の人格が形成していけるのだと確信したりしている。

三月号 春來別離 ―学生に贈る言葉―

いよいよ春の息吹を身近に感じるようになってきた。例年になく温暖であったと云っても、冬が終わって春が訪れると、独り安堵するような心持ちでもある。一年間続けてきたコロキウム・ニュースも今回で最後にしようと思うと、何を主題にすべきかと、あれこれ思案して悩んでしまう。春は、多くの人にとって新たな旅立ちの季節でもある。そこで今回は、この春に巣立っていく若い諸君に改めて肝に銘じて欲しい事柄として、私の心を過ぎった先人の言葉を暫し紹介していきたい。そう云う意味で真っ先に心に浮かぶのが、次

¹² ここまで説明する必要も無いかも知れないが、前者は「桃と栗の場合には芽生えてから三年、柿の場合には八年かかって実を結ぶ」と云う意味で、後者は「冷たい石の上にも三年座り続ければ暖かくなる」と云う意味。いずれも、根気よく辛抱する事を徳とする教えである。

の件である。

子ノ曰ク、憤セズバ啓セズ。悱セズンバ発セズ。
一隅ヲ拳ゲテ之ニ示シ、三隅ヲ以テ反エラザレバ、
則チ復タセザルナリ¹³。

これは「論語」に出てくる一節であり、学生を指導する上では中々興味深いと想っている。「わくわくして興味を持っていなければ指導しないし、もぐもぐしていたら何も云わない。だから、四隅のうちの一つを指し示したら後の三隅を自分で理解するようであれば、再び教える必要はないのだ」と断言しているのである。孔子の厳しい教育方針を知るような想いである。確かに、自分で悟って行動するような自己増幅過程が自然と備わっていないと、学問をしていても加速したり深くなったりしないので、けだし卓見であると思っている。学生を永いあいだ指導していると、こうした自己触媒的作用のような機転のある学生は、研究と自分とのあいだの耐えざる循環が加速していき、学位取得直前頃には指数関数的に研究が飛躍し人間としても成長していくのを実感するものである。いつか私を越えていくのは明白な感じで、学生を指導する立場の者として、これに優る慶びはないと想ったりする。

ところが逆に、一隅を指し示しても残り三隅が分からず、それを一つずつ更に指し示さないといけない学生も、当然の事ながら存在する。そのような学生は、いくら教え諭しても次に一隅を示すような機会に遭遇しても同じ繰り返しを辿るだけで、指数関数的に成長する事が全くない。本来であれば、そうした学生に学位を取得させる必要もないのであろうが、経験を積ませる事によっていつの日か目覚める事を期待すると、早々に切り捨てると云う訳にもいかない。ただ、このままの状態学位を取得しても自分で悟って変革出来ない限り、彼らは一生同じ繰り返しをするだけであらうと想ったりする。

瓶ビールを持って来いと云ったら、本当に瓶ビールだけを持って来るような人間も増えてきたので、身近にもこの言葉の意味するところが実感される。小さい頃に親の手伝いもまともに出来なかったような学生にまま見受けられる事で、瓶ビールが冷えているかどうか、栓抜きとコップも一緒に持ってくるかどうかとかによって、論語で云っているような部分を認識する事もあったりするのである。これは、先のコロキウム・ニュースで指摘した近視眼的な適用の弊害とも関連している問題でもある。

そこで今回は、そうした学生がどうしたら自らで悟りながら勉強出来るように自分を変革出来るかどうかについて、少し考えてみたい。私の拙い経験を基にして考えてみると、一つを指摘しただけで他を悟る事が出来るタイプの学生の場合には、普段から会話の内容が多岐に亘っていて、私が話題を速いペースで切り替えても追従してくる事が多い。とこ

¹³ 金谷 治・訳注、論語、岩波書店（一九六三）九二頁。

ろが、いちいち指摘しなくてはならないタイプの学生の場合には、食事しながらの会話も覚束なく、況や多角的な話題には全く追従出来ない事が多い。自動車を運転する時の道路の状況判断と云うのがあるが、それも全く同様である。前者のような学生の場合には、前方の信号とか車線の走行状況とかを総合判断して円滑に運転しているのだが、後者の学生の場合には、徒にアクセルとブレーキとを交互に忙しく操作しているばかりで、車線の流れに乗ろうとする事が全く理解出来ていないのが判ったりする。このあたりは、指導していた多くの学生の車に乗せて貰った時に痛感した事柄でもある。

だから、そうした事実から判断すると、後者の学生の場合には、キャンバスに風景画を描くような、全体像を確認しながら局所的な仕事を進める総合能力に著しく欠けているのが判ったりする。そこで提案であるが、自分がそう云う類の人間だと自覚したならば、とくかく平素よりひたすらに全体像を掴むような訓練を積む事を勧めたい。研究課題について云うならば、研究目的をポンチ絵にして描く訓練を毎週一回でも行うとよいだろう。

ポンチ絵は描写ではないので正確である必要はなく、どこかをデフォルメしないといけない。どのようなところを簡素化して何を強調するか、精確である必要はないと云ってもどこに拘りを持って表現するかによって、学生が研究目的とそのロジックをどのように理解しているかがよく分かるものである。最初は拙いものであっても、そのうちポンチ絵が研究および自分の進化と共に改良されていく様子が教える側の教員にも見えてくるだろうし、本人も自分の理解を客観的に捉える事が出来るようになるだろう。余談であるが、私の経験によると、研究目的のポンチ絵を上手く描く事が出来る学生は、研究を指導していてもセンスのよいのが判ったりする。そういう学生は、どんどん成長していくものである。細かな部分は二の次であり、全体のイメージだけを表現する事に終始すればよいのである。そうしているうちに、自分が普段の生活でも研究でも客観的に全体像の中の今の自分とか研究の現状とかを把握出来るようになるものである。

もう一つは、総説を書く練習である。普段から読んでいる論文を少しずつ纏めれば資料的には集まるだろうし、他人の研究を文章として纏める事は自分の研究の意義なり独創性なりを考える上では特に有益である。他人の研究の目的・意義・問題点を抽出し、自分の研究の意味を明確に表現することに繋がる筈である。自分で書いた総説の論旨がしっかりしてきたら、英文にしてみるのも良いと思う。あるいは、それを研究室の中で発表して聴いて貰うのも一案であろう。昔と違ってパソコンがあるので、作業自体は大変ではない。ただ、元々作文に慣れていないと大変であろう。そういう意味では、先のポンチ絵のように直ちに効用は期待出来ないかも知れない。

論文も総説もそうであるが、普段から文章を読んで理解する習慣づけをしておく事が大切である。その為にも、乱読の習慣を薦めたいところである。若い時には研究に対する想いや人生の目的や諸々の悩みを抱えて悶々と過ごす事も多いであろうから、私自身がそうであったが、それを少しでも先人に学び苦しみを和らげ悩みから脱却したいと云う気持ちで、普段から小説を読む事を薦める。少なくとも、文庫本を週一冊くらいのペースで読ん

でいる方がよい。私自身、それを目指していた訳ではないのだが、結果として速読即解力が身についてきて、永い眼で見たら研究に役立ったように想っている。小説と云っても純文学から大衆文学まで広いし、自分でもいろいろ読み漁ってみたりしたが、若い頃は特に歴史小説が研究や人生の面では役立つ事が多かったように想う。このあたりも、先の「研究哲学」で紹介したところでもある¹⁴。

総説を書く事は、先のポンチ絵と併せて普段からの修練がいざという時に役に立つ筈である。だいたい、博士課程在学中もそうであろうし、学位取得してからは更にそうあるべきであるが、自分の研究に関するポンチ絵とか文章とかは、組織（あるいは指導教員）から求められたら直ちに提出出来るよう平素より心掛けておくべきである。云われてからすると云う受身なのではなく、進んで実行する事が大切である。いろいろと述べてきたが、確かに「云うは易し、行ふは難し」で中々大変だろう。しかし、何もしなければ何も生まれない。思い立ったら吉日で、とにかく今日からでも直ぐに行動に移す事が肝要だと想う。

今年の大河ドラマは戦国時代の守護大名・武田信玄の軍師であった山本勘助¹⁵が主人公なので、武田家の興亡についての話題もいろいろと巷で見聞きしたりする。本屋の店先に並んだ新刊本の表紙に「風林火山」とか「甲陽軍鑑」の文字を見つけると、懐かしくて嬉しくなってしまう。私が甲州流軍学に強い関心を抱いたのは、先の「研究哲学」でも少し触れたが、ちょうど高校生の時である。それで、武田信玄の戦略・史実を綴っている「甲陽軍鑑」¹⁶の豪華化粧箱に入った全三巻¹⁷を大学入学のお祝に買って貰ったのは、今からちょうど三〇年前（一九七七年）の三月であった。武田流の軍略や兵法に強い興味があった私にしてみれば、「甲陽軍鑑」は永年垂涎的であった。それを漸くにして買って貰ったのだったが、古文のままだったし解釈も記述されていなかったのも、基礎知識を基に読み進むと云っても非常に難解な連続であった事を今でも鮮鋭に記憶している。そこに書かれてあった信玄の人生哲学のようなものは数多くあるが、そのうちの一つを紹介してみたい。これも、若い方にはよく知っておいて欲しいところである。

人はたゞ、我したき事をせずして、いやと思ふことを仕るならば、
分々躰々、全身を持つべし¹⁸。

¹⁴ 由井コロキウム編、研究哲学、JAIST PRESS（二〇〇五）、一一四頁。

¹⁵ 武田信玄の軍師として知られる伝説的な人物で、その実在性については未だに議論が絶えない。若い頃に諸国を遍歴して武芸と兵法を修めたが、そのあいだに隻眼となり足も不自由となり容姿も醜かったので仕官が叶わず、五〇歳近くになって漸く牢人の身から武田晴信（後の信玄）に高禄で召抱えられた。以降、度重なる合戦にも勘助の献策によって武田信玄は勝利を重ねる。永禄四年（一五六一）九月に起きた上杉謙信との四度目となる川中島の合戦では、勘助の立案した戦法が上杉方に見抜かれた為に緒戦において武田側が守勢にたたされ、その最中に討死する。享年六九歳と伝えられている。

¹⁶ 武田信玄の戦略について記した軍学書であり、信玄・勝頼の二代に仕えた高坂昌信の原本を基にして江戸初期に甲州流軍学者である小幡景憲が編纂したと伝えられている。

¹⁷ 磯貝正義・服部治則・校注、改訂 甲陽軍鑑（上・中・下）、新人物往来社（一九六五）。

¹⁸ 磯貝正義・服部治則・校注、改訂 甲陽軍鑑（中）、新人物往来社（一九六五）、三七三頁。

人はただ、自分がしたいと想った事ばかりをするのではなく、嫌だと想っている事を成し遂げていくならば、それぞれの身分に応じて、身を全うする事が出来るものと云っているのである。徒に安易に流れやすい人間の心中をよく洞察しており、敢えて困難に立ち向かおうとする気概によって絶えず自らを鍛えておく事の大切さを訴えているのであろう。勿論、コロキウム・ニュース十月中旬号で紹介した「好きな事の為には嫌な事もやる人生」と云う桜井先生の贈る言葉にも通じるものである事は明白であろう。

ちなみに、先の「研究哲学」で紹介した「凡そ軍勝、五分を以て上となし、七分を以て中となし、十分を以て下となす」¹⁹と云う武田信玄の言葉も「甲陽軍鑑」からの引用²⁰であるが、同様な戒めとして発せられたものであろう。論文の一つ一つを投稿しながら研究を加速進展させる事は重要であるが、それと共に研究者個人の人格や度量も成長しないといけない。そうでないと慢心や驕りが生じて、研究も自分も滅ぼす事になりかねない。戦国武将も研究者も、人間として必要な部分は同じなのである。

最近では、著名な大学教員ほど潤沢な研究資金に助けられて卓越した研究を展開出来るようになってきて、それはそれで大変素晴らしい事である。ところが、そこで研究している学生までが自分が凄いのだと勘違いしているようなケースをたまに見かける事があって、残念に想ったりする。そう云う学生に限って、学会などで質問されても、その真意がほとんど理解出来ていないし、自分の研究に問題がある筈がないと云わんばかりの根拠のない自信に溢れていたりする。普段から自らに厳しい問題意識を持っていないのが判るような話で、正に井の中の蛙と云った感じそのものである。その研究室で学位取得と共に研究人生を終えるのならよいが、そこから巣立って自分で新たに研究を立ち上げる立場になった時に可哀想な事になるだろうと心配したりする。それとは対照的に、どちらかと云うと地味な研究室ながらも独自の発想と努力とによって優れた成果を一流雑誌に掲載させたような経験を積んだ学生には、学会などでの質問への受け答えにしても動じない鋭さのようなものを感じる。自分の足で立っているような充実感があるのだろうし、たとえ発表に拙さがあっても若さを感じるし、荒削りながらも将来楽しみな部分を想ったりする。

勿論、どのような環境にあっても、何を学ぶかは最終的には個人の問題である。研究の上で一隅を示されたら残りの三隅を悟る事が大切なように、研究が進化すればする程、それを推進している自分を客観的に見つめ直し、人知れず更に精進する事も必要である。「甲陽軍鑑」の中で紹介されている信玄の言葉の中には、「遠慮」と云う文字が頻出していて興味深い。たとえば、

人は遠慮の二字、肝要なり。遠慮さへあれば、分別にもなる。²¹

¹⁹ 由井コロキウム編、研究哲学、JAIST PRESS（二〇〇五）、二九一頁。

²⁰ 磯貝正義・服部治則・校注、改訂 甲陽軍鑑（中）、新人物往来社（一九六五）、三七〇頁。

²¹ 磯貝正義・服部治則・校注、改訂 甲陽軍鑑（中）、新人物往来社（一九六五）、三七六頁。

と云っていて、才覚より分別の方を重視しているのが判る。勿論、遠慮と云っても現在の意味とは少し異なっていて、遠くから慮ると云う深慮遠謀のような事の大切さを強調しているのであろうと理解している。いずれにしても、このあたりの件は既にコロキウム・ニュースで紹介してきた佐藤一斎の「言志四録」や洪 自誠の「菜根譚」と一致した記述であり、改めて人格の重要性が認識出来るだろう。研究者として生きる矜持を大切に育てながらも、研究展開と共に自信を性急に肥大させる事なく、人生を着実に歩んで行きたいものである。ただ、研究室のサイズ（学生数の事であるが）とか歴史とかに着目して学生の教育を考えてみると、研究に適した環境と教育に相応しい環境が等しく一致しているとは云えないのかも知れないと思う。優れた研究環境に身をおきながら、そこで如何に学んで成長するかは本人の問題なので、よくよく心して欲しいところである。

余談ながら「甲陽軍鑑」の中で武田信玄は、四〇歳までは戦さに勝つように心掛け、四〇歳からは負けないように心掛けろとも指摘している²²。信玄の「負けないように心掛けろ」と云うのは、必ずしも守勢に徹しろと云う消極的な意味からではないだろう。年齢とともに立場や視点が向上している筈だから、局地的あるいは近視眼的な勝利ではなく高次元で大局的と云うか戦略的な勝利を思考しろと教えているのだと理解している。戦国時代と今とでは四〇歳と云う年齢の意味するところにズレがあるとは謂え、人生の後半をどのように生きるべきか、研究にも相通じる興味深い話だと想っている。私は若い頃には論文が数多く雑誌掲載されるようなどんなデータでも一生懸命書いていたが、ある時になって自分の研究実績の質を上げる為にはヘタな論文を書かない事も大切だと教えられた事があった。半ば酒席の戯言として、論文のインパクト・ファクターで業績を評価するのなら、足し算ではなく掛け算をした方がいいと云う意見も聞いた事がある。インパクト・ファクターが1.0以下の論文を書いたら、逆に業績が下がると云う意味である。

少し話が逸れたかも知れないが、いずれにしても、信玄の四〇歳からは負けないように心掛けろと云う言葉からは、研究者として重ねた年輪に相応しい研究を心掛けるべきだと云う想いを強くしてしまう。そう云えば、横綱相撲と云う言葉を思いだしてしまう。横綱になると勝つのは当たり前だが、勝てば良いと云うものではなく、横綱に相応しい風格ある勝ち方をすべきであるとの意図からの言葉である。周囲からの期待と重圧をものともせず敢然と勝負してこそ、横綱として君臨する資格が認められるのである。私は後一年で五〇歳になるが、五〇歳になったら四〇歳とは異なる五〇歳の研究成果を世に示したいものである。そう云う自分の思想を基にして自分自身で目標を課す事こそが、大学で研究する人間の持ち得る矜持である。文部科学省に提出した中期計画に書いてあるからと云う理由で大学当局から強要されてすべき事ではないのであるが、そうしたご時世なもの、元はと云えば大学人が如何に独自の文化を持ち得ていなかったかと云うツケの現われであろう。そう考えると、つくづくと情けない話である。しかし、反面教師と云う言葉があるように、

²² 原文には、「弓矢の儀、取様の事、四十歳より内は、勝やうに、四十歳より後は負ざるやうにと有儀なり」とある。磯貝正義・服部治則・校注、改訂 甲陽軍鑑（中）、新人物往来社（一九六五）、三六〇頁。

現にそう云う酷い人格の大学人を多く観てきたからこそ、このような反骨的な想いを持つようになって来た訳でもある。どれもこれも貴重な経験として自分をここまで育ててくれたのだと想わざるを得ない。

若い人へ贈るといいながら、少し主題から逸れたかも知れない。自分の研究人生を振り返ってみても、学位取得した当初は生涯の研究目標も持ち得ず、精神的にも安定ではなかったように思う。しかし、それでも自分で人生を創り出していく事に執念を持っていたのは確かである。その執念を具体的にどのような方向に活かしていけばよいのかが定まらなかっただけであったような気がする。生活や職業の安定を望むのは、確かに人間としての本能であろう。だからと云って、災いがないようにと一日中家に籠っているような生涯を過ごしても、全く無意味である。たった一度の人生を悔いなく生きる為にも、研究と自分とのあいだで想いを循環させて成長させ、今からは想像出来ないような自分の将来を築いていって欲しいと考えている。斯く云う私も、この文章を書いた一〇年後には今から想像出来ないような境地にいる事を目指して歩み続けたいと念じている。